

一粒の麦(薬学科のことなど)

北海道大学薬学部長 赤木 満洲雄

北海道大学薬学部の前身は、北海道大学医学部薬学科である。薬学科は昭和 29 年 4 月 1 日に創設された。

北海道大学に薬学科が誕生するまでには、数年間の胎内生活があった。すなわち、それまで北海道には薬学の教育機関がなかったため、道内の薬学志望者は津軽海峡を渡って本州の大学へ行き、薬学を学ばなければならなかった。また道内には薬学、薬業関係者は既に 3,000 人以上も居たのであるが、薬学の新しい学術に関して質疑をただすには遠く本州の大学によらねばならず、道内の薬事関係者の間では北海道に薬学の教育、研究機関を設置することが強く要望されていたのであった。

昭和 28 年頃になって漸く機が熟したのか、北海道大学でとり上げられた。当時の理学部長 杉野晴貞氏(現学長)、医学部長 安田守雄氏(名誉教授)、真崎健夫教授(名誉教授)らの御尽力により当時の島善学長によって検討されるに至った。民間では当時の北海道薬剤師会長 大西哲雄氏、秋山愛生館社長 秋山康之進氏らが道内の薬事関係者を糾合して北海道大学薬学科設置期成会を結成し、上記二氏がそれぞれ会長、副会長となって関係各面に陳情をくり返し促進された。政府もその必要を認めて、医学部に薬学科を設置することにし、昭和 29 年 4 月 1 日より発足することが決まったのである。

北大薬学科としては上掲の方々のほかに道内外の各地の多くの期成会有志の方々の努力があったこと、誕生の時の産婆役として当時の医学部長 安保寿氏(名誉教授)、また当時の薬学視学委員の秋谷七郎氏(東大名誉教授)、高木誠司氏(京大名誉教授)の御尽力があったことを省くことはできない。

薬学科の最初の教授として私が発令され、29 年の 4 月下旬に着任した。私は、初め内交渉があったとき、北海道は馴染みのないこと、私には任が重過ぎることを自覚していたので、強く固辞した。秋谷、高木両先輩から半ば強制的に受諾させられて、着任したのであるが、来て見て私の任務は並大抵の仕事でないことが痛感させられた。私に与えられた仕事の条件は次のようだった。

- (1) 建物は新築しない。
- (2) 医学部内で空間を供出して貰うこと、その改造に要する費用は若干出る。
- (3) 教育、研究用の機器、資材は国の定めた僅かな費用で調える。
- (4) 教官の宿舎は各自調える。

その当時の国の財政は苦しいことは分かっていた。殊に北海道は戦後の復興が本州より 5 年は立ち遅れていた。北大全体も、医学部もその建物は荒れ果てていた。私の置かれた条件は致し方ないことは理解できても、之では薬学部をつくるなど云われたのと同じであると私には思えた。

だが私は挫けなかった。私には薬学に対する情熱があった。たとえ火山灰地帯の不毛の地でも薬学の芽を出させたい熱情があった。

最初の第一年は準備の年である。北海道は私にとって初めての馴染みのない土地であったが、土地に馴染むにはその土地の人々に馴染よ、で私は努めて大学の内外の人に接触することに努めた。殊に道内の薬業関係の人には積極的に知り合うことに努めた。私にとって最も幸せだったのは私の交き合ったこれらの方々がみな善意の人々であったこと

である。次第に土地に馴れるにつれて私は北大と北海道に対して強い愛情を持つに至った。

この間に薬学科建設の構想は漸く固まった。

学園の建設は植林事業と同じである。少なくとも 30 年、50 年の歳月を要する。自分は始めの開墾と苗木の移植を手伝うものである。人作りの根元は作る人にある。だが現代の科学教育は一人の力で成し得るものではない。多くの人を得て共同で成就され得るものである。そのためには人の和を保ち得ることが必須である。私の任務の成否は教授陣、教官陣の構成如何にかかっている。環境の整備はその後協同して実現すればよいと考えた。

今だから敢えて云えば、私は次のような茶道精神を基調としていたようである。「一期一会の覚悟をもって一座建立に努める。和敬の二字を基本とし、主は客のために馳走し、工夫し、主客融合を成就する」と。

私は教授の選考にとりかかった。このとき次の方針を決めた。まず研究に強い情熱をもっていること、協調的なこと、若いこと、この三つである。初めの二つは当然であるが、最後のことはある危険性を含んでいる。だが敢えてこのことも方針の一つにしたことには多くの理由があったが、私にとっては次の二つが最も大きな理由であった。戦後欧米と国交回復したのち、日本の薬学の研究方法は大きな変革がなされた。私のような戦前派にとっては、戦争中の空白のため新しい研究方法に対処するには頭の切りかえの努力が大変である。それ故、新しい方法で自分の研究を進めて来た年齢層の方が最も適当であると考えられた。また将来薬学科が 10 周年を迎える頃には必ずや第二の飛躍がされねばならない。その頃に円熟期に入る人が望ましく、老成期になったのでは困りものである。老人は私ひとりでは結構である。

準備期 1 年の終わりには薬学科創設の協力者たる教授候補者も内定した。第 1 回生を受け入れる場所も医学部内で大体の見当もついた。教育、研究用の機器、資材の購入も国の少ない費用を補うべく期成会の諒解も得られたので、水野、木村、三橋の当時の教授候補者であった 3 先生を札幌に招いて、基本方針を決めるべく会議をもった。5 月 24 日、25 日のことであった。当時の 3 先生はいずれも未だ若く、30 歳代であった。それだけに 3 人とも極めて積極的で、建設的な意見を活発に出して頂いて大変嬉しかった。このときの会議が薬学科建設の具体化へのスタートが切られたものであるので、私にとっても極めて印象的であるとともに、北大薬学科の歴史にとっても大切な一頁をなすであろう。

伴教授はその当時はアメリカへ留学中であったので、翌 31 年帰国と同時に札幌へ着任せられた。この年 31 年で予定の 7 講座のうち、薬化学(水野教授)、薬品分析化学(木村教授)、生薬学(三橋教授)、衛生化学(赤木教授)、薬品製造学(伴教授)の五講座が完成し、第 2 回生を受け入れた。

このときには基礎医学の敷地内には新設予定の 2 講座を収容する余地もなければ、大学院設置の時の収容場所もない状況であった。漸くにして付属病院の西北隅の隔離病棟を薬学科に譲り受けることになり、南に 3 講座、北に 4 講座と約 1km を離れて薬学科を形成することになった。昭和 33 年秋のことである。

薬剤学(当時は林教授)と薬効学(岩本教授)の 2 講座は既にその前から発足していたのであるが、既設の 5 講座と同じ空間が得られたのは、漸くこの時からであった。このことは致し方ないとはいえ今でも誠に相すまなく思っている。

僅か 7 講座でありながら南北約 1km 離れて分散する変則薬学科の生活が始まったのはこの時からである。そしてそれが今日まで 7 年以上もつづいている。このことは恥ずかしい乍ら日本一である。またこのことは研究上、教育上相互の連絡に大変不利であった。よくこの不利、不便を克服して今日に至ったのは、薬学科の全職員の共同の目的への協力的な努力の賜物と深く感謝している。

薬学科の思い出として最も不快なことは、発足に当たって所定の 7 講座分の空間が得られず、学年進行に伴って新設される講座のための空間を、毎年毎年医学部内の各教室を頼み廻らなければならなかったことである。大学院設置の時もまた然りである。供出して頂いた医学部の各教授や教室員の方々には誠に相済まず深く感謝しているのであるが、この様な仕組みに対して私は激しい憤りを感じざるを得ない。だが 7 年ないし 10 年各講座の教室員は協力して多

くの雑務も分担しあつて謀殺されながらも、本職の教育と研究に精魂を打ちこんで、生活の全部をこれに投入して今日までやって来た。

この春で薬学科の卒業生も第 8 期生を出し、計 308 人の薬学士を社会に送った。みなまだ若いが、薬学界、薬業界その他の第一線でそれぞれ活躍して居られ、今後の大成が期待される。大学院の博士課程もすでに 3 回生を送り出した。将来の活躍が待たれる。

薬学、薬業の進展にともない日本の薬学教育はこれに対処するべく大変革を余儀なくされた。北大薬学科も薬学科と製薬化学科の二学科制の薬学部に変身し、この 4 月より再出発することになった。

この時に当たり、過去薬学科時代を振りかえり、初期の思い出の一部を記すと共に、我々の仲間がこの間に行った研究の一部をその題目だけを綴った。私どもとしてはその一題ごとに深い思い出を持っている。

薬学部設置については杉野目学長はじめ大学当局、文部省はじめ政府当局各位の御理解と御尽力に深謝する。薬学科時代については創立当初の安保医学部長はじめ歴代の武田、安部医学部長ならびに各教授の御指導と御支援は忘れ得ない。また薬学科発足当初において薬学科設置期成会の方々、私共の要請を全面的に受け入れて研究用機器と図書に寄贈を頂き、国費の不足分を補い得たこと、また教官の住宅のことまで御心配頂いたこと、このことも私の終生忘れ得ないことからである。もし私共が短い間に些かなりとも研究実績を上げ得たものとすれば、期成会のこの御厚配は強い誘起剤の役割を成したものと深謝している。

この短文を綴りながらも私は一つのことが成るためには如何に多くの人の力が絡み合っているかを痛感したことを付言して筆を擱く。

1965 年 6 月 10 日

昭和 40 年に医学部薬学科から薬学部へ昇格した記念として発刊された「北海道大学医学部薬学科研究業績一覧(1956 年～1965 年 3 月)」に、当時の学部長の赤木満州雄先生が執筆された序文を再掲した。